

生涯学習につながる 学習習慣づくりの視座

高 田 喜久司

一、「受験のため」の学習習慣からの脱却

急激な変動期にある今日の教育改革は、決して部分的な変革にとどまらず、むしろ全体的かつ構造的な変動であるところに、これまでにない特質が認められる。特に、学校ないし教室レベルでは、新しい学力観・評価観の定着、さらには偏差値教育の追放・批判的克服が、緊急の課題となつて推進されているのである。当然のこととはいえ、ここで論議の対象とする生涯学習時代における学習習慣の考え方も、「今、求められる学習観」によって、再吟味されなければならない性質を有するものであろう。

(1) アメリカが学ぶ日本人の「学習習慣」

ここに、「日本教育の現状」をアメリカの教育専門家が分析した報告書（天城勲編著『相互に見た日米教育の課題』日米教育協力研究報告書）「第一法規、昭和六十二年」がある。そのなかで、まず日本の教育は、経済の発

展と同様、世界の第一級の水準にあることは、もはや隠れもない事実である、と指摘した。そして、これまでの日本教育の業績あるいは際立っている特徴の一つとして、アメリカ側から「学校でよい成績を収めようとするやる気を生徒に持たせ、効率的な学習習慣を身につけさせていること」が掲げられた点は、看過できない。

さらに、日本の教育からアメリカが学ぶべき事項にも、「すべての子どもに勤勉の精神とよい学習習慣を植えつける確固たる姿勢」を堅持すべきだ、というのである。

この分析に従えば、学習習慣づくりは、どうやら、わが国教育の喜ぶべき成果の一つと考えてよさそうである。確かに、小学校入学から大学受験に至るまで、子どもは学校から帰ったら家庭で、まず椅子に座り、机に向かって、計画を立てて復習・予習をするように強いられる。学校でも、「チャイムが鳴ったら着席する」「着席したら教科書を開く」「先生の話をよく聞く」「授業中は、よそ見や私語をしない」「進んで意見を発表する」等々と、習慣づけられているのが実情である。

とにかく、日本の子どもは、「よく勉強する」し、相対的にいえば学習習慣も確立していると推断される。この点は歓迎したい。「教育大国」と称される一因かもしれない。

(2) 偏った「受験」のための学習習慣

しかし、この報告書全体のニュアンスは、必ずしもプラス要因としてののみ、描かれているのではなさそうであることに留意しなければならない。読み進めていくと、学習習慣の質や中身を吟味する方向へと駆り立てられるのである。

たとえば、日本では「親も教師も児童に小学校の一年のときから規則正しい勉強の習慣を植えつけようとする。特に、低学年では速さや直感的なひらめきよりも、注意深く、よく考えて的確で正しい答えが出せることの方を重要視する。学習のすべての過程にわたって、とりわけ厳しく重大な高等学校や大学の入学試験準備においても

繰り返しと暗記が大切と考えられている」(同書一一四頁)という批判に近い文言に接することができからである。

どうやら、この文言の意味する内容は、「受験のため」であり、「成績をあげるため」、また「正答が出せるため」の「学習習慣」づくりといった、どちらかといえば近視眼的な目標を達成するためのもの、といった色彩が強いように解される。もちろん、成績や受験という目標を達成する「学習習慣」の重要性は、根強い影響力を持つがゆえに、全面的に否定し得ないであろう。しかし、一歩進めて、生涯学習体系への移行、偏差値教育の追放・克服という課題、「新しい学力観」の唱道を基底にした「学習観の変換」が叫ばれる時点において、こうした思想潮流に積極的に即応した「学習習慣」も考慮されてよいのではなからうか。「受験のため」の学習習慣づくりだけでは片手落ちというものであろう。

二、偏差値バブルの崩壊と学習観の変換

既存の体制や権威が次々と崩壊していくなかで、受験だけが絶対的な権威を保持しているかのようなのである。子どもが受験に費やす時間とエネルギーは莫大であろう。子どもは受験のために勉強しているのではないか、という錯覚に見舞われるほどだからである。ここに「教育」と「受験」が同義語であるとして揶揄される側面がある。「偏差値受験や業者テストの成績で子どもたちが振り分けられるのは不正義である」旨の鳩山元文相の談話を受けて今日、偏差値からの脱却は学校教育の緊要課題となった。かくして偏差値バブルが弾けることによって、旧来の受験という絶対的権威も揺らぎはじめている。教師や親、子ども、さらに社会全体の意識変革、具体的には偏差値偏重から個性重視の学習観への変換が望まれるのである。

(1) Learn からStudyへの学習観の変換

かつてユダヤ人のトケイヤーが日本に対する好意に満ちた警世の書『日本には教育がない』（徳間書店、昭和五十一年）を書いた。先の日米の報告書を踏襲するかのごとく、そのなかで彼は、日本では子どもたちが常に「勉強」している。しかし、勉強の習慣を検討してみると、「習う、教わる」（Learn）勉強だけで、主体性をもって積極的に「研究する、調べる」（Study）という意味の勉強の習慣は、希薄であると指摘したのである。

勉強するというと、ただ野放図に知識や情報を子どもの頭に詰め込むことを指しているのが日本の実情である。学習習慣の確立も、その例外ではない。偏差値による受験競争が、本来の教育を無視する土壌に怪物のようにびこっているからであろう。したがって、「日本では幼稚園から大学を卒業するまでLearnをするがStudyはまったくしない」（同書、一二頁）ことになる。

これでは「思索する」とか、「真理を追究する」ことにはならない。他人に合わせて、ものを覚える人間は育つても、自分から進んで創造的に思索するような人間は育たない。

脱偏差値が叫ばれる今、Learnもさることながら、よりStudyに傾斜をかけた学習習慣の樹立が期待されよう。生活科に代表される体験や活動重視の理論的基礎は、Studyを強調する点に求められる。机に向かうことよりもStudyする学習習慣が今、焦眉の課題であるのかもしれない。

(2) 生涯学習の基礎を培う学習観への変換

Studyを重視する学習習慣はまず、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力を重視する「新しい学力観」に立脚することと、軌を一にする。次に、学習者が主体的・自発的に学んで、自己を変革する営みをメインとする生涯学習に通底する学習観の転換とも換言できよう。

そして、これらは総じて、「主体的に学ぶ意志、態度、能力など」の「自己教育力」という概念によって統合さ

れるのである。わが国教育の「画一性・硬直性」、「過熱した受験競争」に歯止めをかけようと企図された自己教育力の育成は、本来、生涯学習の基礎としての学校教育が、とりわけ重視しなければならない観点を提言したと解釈される。周知のように、「自己を生涯にわたって教育し続ける意志を形成すること」が、自己教育力を育てること、と考えられているからである。

すなわち、学習のエネルギー源たる「学習意欲」、さらに「学習の仕方」を習得することによって、絶えずよりよい「生き方」を探究しながら自らの生き方を問い返し、自己改善を図っていく能力への学習観の変換である。人生いかに生きるべきか。人生八十年時代にあつて、生涯学び続けなければ人間的に心豊かな生活を送ることはできない、と言われる。したがって、変動の激しい社会では、いかに高度な学校教育を受けた人であっても、次々に新しく出現する知識や技術を生涯、学習しなくてはならないのである。

このような状況のもとでは、偏差値や知能が高いということもさることながら、生涯にわたって学習を続けようという意志や意欲を持った子どもへの期待が、より大きいことは言うまでもない。

三、生涯学習の基礎としての習慣形成の基本的視座

生涯学習の具現化策や偏差値バブルの崩壊は、学習観の変換を招来するものであった。

その学習観変換の内実は、異論を承知であえて言えば、おおむね、知識・理解・技能を啓培する「実質陶冶重視の学習観」から、子どもの精神的能力（思考力、想像力、意志力、応用力、表現力、判断力、鑑賞力等々）を涵養する「形式陶冶重視の学習観」への移行という思想潮流として結論づけられよう。こうした思潮に相応しい学習習慣づくりが要請されているのである。

生涯学習の基礎は、意欲的にチャレンジする態度が重要であり、主体性をもって課題を解決できる精神的な諸

能力ということになる。学習習慣もスパンの長い学習のための習慣形成でなければならない。ここでは、学校で期待される精神的能力の基盤となる学習習慣づくりの基本的視座を、少しく吟味することにしよう。

(1) 「問う能力」を育成する学習習慣

生涯学習の基礎として何よりも大切なことは、子どもに「問う能力」を習慣づけることではなからうか。学習習慣は、問うことを骨子とした習慣でなければならないと考えるからである。自己教育力も常に、問いかけることによって育成されるものであろう。

すなわち、意欲があつて初めて問いも生まれてくる。逆に、問いが肯定されることによって意欲も喚起・維持される。子どもは自然や社会事象、自己など、あらゆる対象に対して問いを連続的に発している。問うことは、子どもにあつて主体の確かめであり、主体そのものであろう。問うことによって自分自身というものを、少しずつ発見していくからである。

ところが、学校に入学した途端、問いは教師によつて発せられ、子どもはただ、答えるだけとなるのである。教育界において、問いの主役を演ずるのは、どうやら教師であるというのは確かなように思われる。子どもは、問い（あるいは問い方）を学ぶ（文字どおり「学問」する）ために通学していることを忘れてはならない。

しかるに、今の子どもは問う能力がきわめて弱い、と言われている。さらに、致命的なことは、子どもの問いを育ててやろうと習慣づけられない教師の姿勢こそ、憂慮すべきではなからうか。子どもに問いの復権を、と願わずにおれないのである。

子どもは元来、問う存在であるはずだ。生まれ、新たなものを獲得し、成長し続けるプロセスにおいて、子どもは常に、問いかけ、問い続けている。自分の存在が何であるかを問い、人間としての生き方をも問うているのである。

このように、子どもにとって問うことは、実は学ぶことであり、ひいては生きることに通ずるものである。人間らしく生きるとは、問いを媒介にして生涯、学び続けることである。

子どもは外から強制されて教えられる存在ではない。自ら学ぶ能力をそなえた存在であるところからこそ、問う存在としての人間の価値を認めてやらなければならない。問いかける能力、問うことによって自らを拡大できる可能性を潜在させる問いを無視した学習習慣は、もはや生涯学習の基礎を、自ら否定するものであると言ってよからう。およそ、問題解決や探究する態度も、学習の仕方も、考える学習習慣もまず、問う能力が大前提であることを肝に銘ずべきである。

(2) 「学習の仕方」を培う学習習慣

子どもの「学習の仕方」を念頭におかない教育は成立せず、すべての学習は、学習の仕方を学習する側面を内在させているはずである。学習の仕方の強調には、次の三点の背景が考えられよう。

第一に、科学や技術の進歩によって、科学の成果を学ぶだけでなく、科学の方法や探究の仕方を身につけることが重要になってきたことである。

第二に、情報量が爆発的に増大し、子どもはすべての情報を理解することは不可能になり、直面する問題を解決するためには関連する情報を収集し、いかに活用するかという情報処理の仕方を身につける大切さである。

第三に、学校で教えられる知識や技術は、短命化しており、個々の知識や技術が陳腐化する度合いが大きいことである。

しかるに、これまでの学校教育は、知識を増やすことに熱心で、学習方法を習慣づける点において、難点があったと言える。学校では、「知識は教えるけれど、知識の獲得のしかたは、あまり教えてくれないのである」(梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書、三頁)と指摘されて久しい。

日常的に考えても、子どもはしきりに親や教師から「もっとしつかり勉強しなさい」、という学習習慣づけの注意がなされる。Studyを重視する学習観にしても、学習の仕方が習慣づけられていなければ画餅に帰するからである。生涯学習につながる学習習慣づくりの要諦は、「学習の仕方」がアルファであり、オメガであると言つてよいであろう。

しかし、どのように学習したらよいのかを教えてくれる教師は、意外に少ないと言えるのではなからうか。「学習の仕方がわからない」という子どもの悲痛な叫び声に、教師はどう答えたらよいのか。教師は「学習の仕方」を教え、習慣づけてくれるプロでなければならぬという視座に留意したい。

(上越教育大学教授)

[参考文献]

- ① 高田喜久司「『問い』の教授学的検討」(信濃教育会教育研究所年報、第三巻、平成元年度)
- ② 柴田義松「学び方を育てる先生」(図書文化、平成四年)